

ジャック・ルヴェル「ミクロ分析と社会的なるものの構成」

Jacques Revel, “Microanalysis and the Construction of the Social”, Jacques Revel and Lynn Hunt (eds.), *Histories: French Constructions of the Past*, The New Press, 1995, pp. 492-502.

紹介

著者ジャック・ルヴェルはフランスにおけるミクロストリアの方法論の第一人者。今回取り上げる論文では、フランス社会史の特徴が簡潔に描写され、ミクロストリアが社会史にもたらした方法論的な影響について論じられる。

○フランス型の社会史¹ (pp. 492-494)

- ・ アナール学派の周辺では、社会史の自己規定が過去 60 年〔1995 年時点から〕にわたって変化してきた。しかしながら、比較的变化しなかった特徴もあった。
- ・ そうした特徴は、アナール学派が登場する四半世紀前にデュルケム学派の社会学者フランソワ・シミアンが歴史家たちに提示した重要なプログラムにまで跡付けることができる。
- ・ シミアンが論じたのは、将来、歴史家たちはユニークで偶発的な事柄（個人、事件、個別事例）から、そのみが真の科学的研究の対象となりうるような事柄（反復的なものとその変動、法則を引き出すことができるような観察可能な規則性）へと注目を変えなければならないということだった。
- ➡ アナール学派の創始者たち、そしてその後継者たちによってなされたこの最初の選択が、フランス型社会史の根本的な特徴を照らし出してくれる。
- ・ フランス型社会史の根本的な特徴。
 - ① できるかぎりもっとも大きな集合を研究する
 - ② 社会現象の分析では測定すること(measurement)を優先する
 - ③ 大きな変化を可視化するのに十分なほど長いタイムフレームを選択する
- ・ 文書史料から限られた数の性質や顕著な特徴を取り出して、それらの時間的な変化を追うためには、単純な指標を定める必要があった。こうした指標となったのが、価格、収入、富や職業の分布、出生、結婚、死亡、署名、本のタイトルやジャンル、敬虔なおこない、などである。

¹ ○で表記した小見出しはレポート作者が付した。

- ・ マルク・ブロックやリュシアン・フェーブル、さらに次の世代のエルネスト・ラブルースやフェルナン・ブローデルは、シミアンやデュルケム主義者たちからある種の学問的主意主義を引き出した。
- ・ 学問的に研究可能な唯一の対象とは、経験的な妥当性に従う仮説のもとで、明確な手続きに基づいて構成されたものだけと見なされるようになった。
- ・ ところが、歴史研究の実験的なあり方がしばしば忘れられてしまい、歴史家が構成した対象の多くは本来的に仮説的であったにもかかわらず、それらが現実の事柄であるかのように扱われる傾向が強くなってきたのである。
- ・ こうした例は、アナール学派の歴史のかなり早い段階において見出すことができる。
- ・ さらに、観察のスケールは実験的な変数としては扱われていなかった。さまざまな社会的領域（教区、地域、都市、職業）は、連続的で同質であると考えられており、データを集めるための中立的な枠組みとして扱われていた。

○社会史の危機とミクロストリアへの関心（pp. 494-496）

- ・ このような社会史のモデルは、1970 年代末から 1980 年代初頭に危機に陥った。
- ・ 今日の歴史家たちの多くでさえ〔1995 年時点〕、危機の真ただ中にいるということには同意がある。
- ・ 歴史家たちは、いくつかの異なる理由から自分たちの実践について再考し始めた。コンピュータはこれまで以上に膨大なデータの保存や処理を可能にしたが、歴史家の間の方は技術の進歩と足並みを揃えていないように感じられた。膨大な数量的研究のプロジェクトが収獲逓減の法則に直面し始めたのである。
- ・ 専門分化によって、かつては開かれ統一されていた研究分野が断片化する傾向にあった。こうした傾向は、かつて社会科学の諸分野を結びつけていた大きなパラダイムが苛烈な攻撃にさらされたために、より強く感じられるようになった。
- ➡以前は、ほとんど疑問に付されることのなかったマクロソーシャルなアプローチの確かさが侵食されてしまった。ミクロストリアへの関心は、こうした危機の症状であるとともに、以前の方法に対する異議を表現し明確にするための考え方の源泉であった。
- ・ ミクロストリアの定義において本質的な要素となるのは、分析のスケールを変更することである。
- ・ 観察の特定のスケールを選択することは、認識に諸々の効果をもたらす。レンズの焦点距離を変えることは、観察対象のサイズをただ拡大するだけでなく、その形状と組成を変化させるのである。
- ・ 地図のスケールを変更することは、変わらぬ現実をただ大きく描いたり小さく描いたりすることではない。そうではなくて、表示する内容を変えることなのである。

→この意味では、ミクロの次元が特権的というわけではない。重要なのはスケールを変化させるという原理であって、特定のスケールを選択することではない。

○ミクロストリア的なスケールを選択することによる認識の効果 (pp. 496-498)

・以下、具体的な研究文献を取り上げつつ、ミクロストリアのアプローチについて論じる。

①エドアルド・グレンディ「ミクロ分析と社会史」² (1977)

→グレンディによれば、社会史は最大の集合を可能とするようなカテゴリーの視点からデータを整理してきたために、社会的ふるまいや社会的経験、集団アイデンティティの形成に関する事柄を把握するのに失敗し、さまざまなタイプのデータの統合を妨げてきた。グレンディは、全体論的アプローチを強調するために、社会史のアプローチを人類学のアプローチと対比させた。このような主張はあまりに一般的に見えるかもしれない。しかし、注目すべきはミクロストリアの歴史家たちの特徴的な関心をグレンディに見出だせるということである。つまり、抽象的な性質を測定することに基づく研究戦略ではなく、可能な限り多くの性質を統合し相互に関連付けることに基づく研究戦略への関心である。

②カルロ・ギンズブルグ、カルロ・ポーニ「名前とゲーム——不均衡な交換と歴史学の市場」³ (1979)

→こうしたグレンディの関心は、ギンズブルグとポーニの刺激的なテキストによっても確認することができる。彼らが提示したのは、「名前」あるいは固有名詞を新しいタイプの社会史を作り上げるためのマーカーとして用いることだった。ある個人や集団の運命の糸をたどることによって、新しい角度からの視点が得られるのではないかという希望があった。ギンズブルグとポーニによれば、「調査地域が十分に限定されているならば、さまざまな社会的文脈のなかに同じ個人がいるのを突き止めることによって、一連の資料は時間と空間のなかで重ね合わせることができるのである」。こうしたアプローチによって「生きられた経験を再構成する」ことができると考えられた。ところが、こうした方法の定式化には締めりがなく、究極的には漠然としていた。

² Edoardo Grendi, "Micro-analisi e storia sociale", *Quaderni storici*, 35, 1977, pp. 506-20.

³ Carlo Ginzburg e Carlo Poni, "Il nome e il come: scambio ineguale e mercato storiografico", *Quaderni storici*, 40, 1979, pp. 181-90. 歴史学分野文献レビュー(Ginzburg and Poni 1991(1979))を参照のこと。

③ジョヴァンニ・レーヴィ『無形の遺産 — 17 世紀ピエモンテにおけるある祓魔師の生涯』⁴ (1985)

➡重要なのは、社会的経験を可能な限り最も幅広く包含することによって、現実描写を豊かにすることである。この方法はジョヴァンニ・レーヴィによって実践された。レーヴィは 17 世紀後半から 18 世紀前半にかけての 50 年間に、サンテナの村の全住人の、記録として残っているすべての伝記的事件を収集した。レーヴィの目的は、諸個人、諸家族、諸集団といったさまざまな行為者によって展開された社会的戦略を、それぞれが置かれていた位置と利用できる資源の点から明らかにすることであった。

④マウリツィオ・グリバウディ『労働者の旅程 — 20 世紀初頭トリノにおける空間と社会集団』⁵ (1987)

➡グリバウディもレーヴィと似たようなアプローチを採用した。グリバウディは地理的・職能的な移動、人口統計上の動き、地方の農場から都市の工場への移動にともなう諸戦略を再構成した。グリバウディによれば「問題なのは、サンプルとして選んだ家族がどのように旅と自らの社会的アイデンティティを折衝したのかということである。どのようなメカニズムがある人たちに移動を可能にし、ほかの人たちには留まることを強いたのか。個々の見解や戦略はどのように変化したのか。言い換えれば、労働者の視点から問題を設定するということは、労働者が彼らの多様な経験や様相を作り上げるのに用いたさまざまな材料を調べるということであり、それによって彼らを引き合わせたり、引き裂いたりするダイナミクスに光を当てることを意味するのである」。

- ・ミクロストリアのアプローチは、新しい、より複雑な、より柔軟な変数を導入することによって社会分析を豊かにしてくれる。しかしながら、このような方法論的個人主義には限界が存在する。なぜなら、わたしたちは社会的存在、あるいはむしろ集合的经验に関して、それらを形成しそれらの機能を統御している諸規則を発見しようとつねに試みているからである

○社会史へのミクロストリア的アプローチの影響 (pp. 498-501)

- ・「古典的」社会史は、主として社会的存在（村、教区、都市、管区といったコミュニティ、職能集団、身分、階級）の歴史と見なされてきた。こうした存在の境界域について

⁴ Giovanni Levi, *L'eredità immateriale: carriera di un esorcista nel Piemonte del Seicento*, G. Einaudi, 1985.

⁵ Maurizio Gribaudi, *Itinéraires ouvriers: espaces et groupes sociaux à Turin au début du XX^e siècle*, EHESS, 1987.

議論することもできたが、それが根本的に問題にされることはなかった。

- ・その結果、過去 3, 40 年〔1995 年時点から〕にわたって蓄積された膨大な研究成果を見通してみると、すでにどこかで見たような停滞したカテゴリーであると感じてしまうのである。
- ➡こうした傾向のせいで、E. P. トムソンの『イングランド労働者階級の形成』⁶ (1963) のような研究の影響もフランスでは妨げられてしまった (フランス語訳が出たのはようやく 1988 年になってからである)。

- ・フランスの歴史家たちは、孤立した多くの試みの後で漸進的に、分類の観点からなされる分析がもはや可能ではないということに得心した。このような変化が生じたのには次の二つの理由がある。そのどちらの場合においても、ミクロストリアの観点を選択することが非常に重要だった。

①歴史的分類法の基礎となっている分類基準の性質に関する問題の浮上

社会分析のカテゴリーに関して、一般的な (外的な) カテゴリーと内的なカテゴリーのズレがもっともはっきりと現れるのはローカルなレベルにおいてである。この問題は人類学の影響、とくにローカルな分析に焦点を当ててきたアメリカの人類学の影響によって、浮かび上がってきた。

②社会的相互作用の役割の強調

歴史家は、研究対象の用いる言語をただ借りてくるだけでなく、それを複雑な社会関係 (競合、連帯、同盟、など) のネットワークを通して機能する複数の柔軟な社会的アイデンティティを構成するための指標として用いるべきだという考え方がある。こうしたアプローチは複雑であるために、観察のフィールドを限定する必要がある。ミクロストリアの歴史家たちは、こうした限定を認識論的な原理に変えて、社会的な集合や分断の様相を再構築するために個のふるまいを利用しようとする。

- ・②が実践された研究の具体例

シモーナ・チェルッティ『都市と職人 ― 17、18 世紀トリノにおける同職組合の言語の誕生』⁷ (1990)

- ➡ギルドを研究対象とする歴史記述は、自然発生的な有機体論的性質がきわめて強い。ギルドは明らかに機能的な共同体であり、近世都市社会においてほとんど自然な構成

⁶ E.P. Thompson, *The making of the English working class*, V. Gollancz, 1963. [市橋秀夫、芳賀健一訳『イングランド労働者階級の形成』青弓社、2003 年]

⁷ Simona Cerutti, *La ville et les métiers: Naissance d'un langage corporatif (Turin, 17e-18e siècles)*, Editions de l'EHESS, 1990.

要素となるくらい強力な統合的な効果を発揮したと考えられている。チェルッティは大胆にも、こうした確信を脇に置いて、職業的アイデンティティや制度的表現は所与のものではなく、個人や家族の戦略を含む不断の努力によって作られ再定義されるということを示した。伝統的な歴史学におけるギルドの静態的な世界に代わってチェルッティが提示したのは、すべてが衝突、交渉、当座的な関係性からなる世界だった。チェルッティは関係性を強調することで、集団のメカニズムを脱自然化したのである。

➡こうした研究上の焦点の移動は人類学者以上に、歴史家にとって明らかだった。社会史の方法や概念に関する多くの重要な再定義がこうした動きには暗に含まれていた。

・ 社会史の方法や概念に関する再定義

①社会史的分析の前提の再定義

➡明確な基準に基づく分類体系に代わって、ミクロ分析は社会的アイデンティティを再定義、再形成するような諸々のふるまいに焦点を当てる。

②社会的戦略という概念の再定義

➡歴史家は戦略という概念をあいまいな意味で使いがちであった。この語は、一般的な機能主義的仮説を強化するのに役立つこともあれば、もっと平凡に、成功した個人のふるまいを特徴づけるのに役立つこともあった。ミクロストリアの歴史家は反機能主義的態度をとり、複数の個人の運命を考慮することによって、所与の図柄のなかで各個人や集団が利用可能な資源という観点から、〔個人や諸集団にとっての〕可能性の空間を再構成しようとするのである。

③コンテキストという概念の再定義

➡ミクロストリアのアプローチに特徴的なのは、統一された、同質なコンテキストというものが存在し、そのなかで社会的行為者が選択をおこなうという考え方を拒否することである。ミクロストリアの歴史家が提示しているのは、観察されたふるまいを解釈するのに必要な複数のコンテキストを再構築することである。これは次に掲げる観察のスケールの再定義にも関係している。

④観察のスケールの再定義

➡もっとも基本的なレベルにおいては、社会的存在の歴史は無数の極小の諸事件にまで分解してしまうので、それらを有意義な仕方で編成するのは困難である。モノグラフという伝統的な概念は、一般的な仮説をローカルなレベルで確認するという役割によって、有意義な編成を達成しようとしてきた。ミクロストリアにおける「複数のコンテキスト化」(multiple contextualization)は、これと全く異なる前提に基づいている。まずミクロストリアにおいては、それぞれの歴史的行為者は、程度の差はあれど、

もっともローカルなレベルからもっともグローバルなレベルまで次元の異なるさまざまなプロセスに参加しており、ローカル・ヒストリーとグローバル・ヒストリーとのあいだには断絶がないと考えられている。ある個人、集団、地域の経験によって理解が可能となるのは、グローバル・ヒストリーのある特定の調子(modulation)なのである。ミクロストリアの視点が与えてくれるのは、マクロソーシャルな現実の細かな、部分的な、切断された型ではなく、それとは異なる型なのである。